

(鹿屋市高須町榎木原)

**位置と環境**

高須川を北側に、鹿児島湾を西側に見下ろす標高約45mのシラス台地上にある。東側にある小谷の谷頭には湧水地点がある。

**調査の経緯**

国道269号バイパス建設工事に伴って昭和60(1985)年に、一般地方道永吉高須線改良工事に伴って平成元(1989)年にそれぞれ鹿児島県教育委員会が発掘調査を実施した。

**遺構・遺物**

縄文時代早期から近世まで長期にわたる複合遺跡である。縄文時代は晩期を主体とするが、早期から晩期までの資料が確認されている。遺構は、円形で4本柱をもつ入佐式土器期の竪穴住居跡1軒や、黒川式土器期の土坑2基、それらより時期がさかのぼるとみられる集石遺構が5基検出された。

縄文土器は早期から晩期まで多くの土器型式が出土した。早期の土器は前平式・押型文・桑ノ丸式・塞ノ神式土器などが少量ながら出土している。

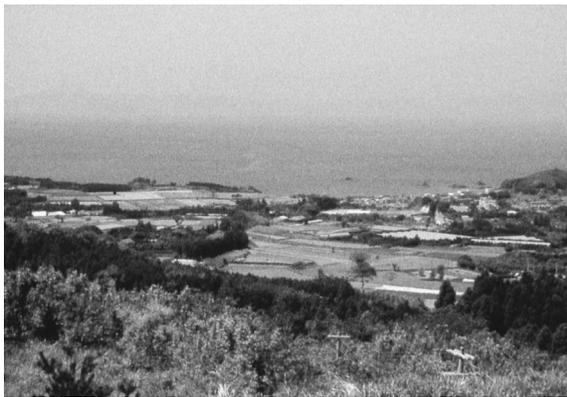
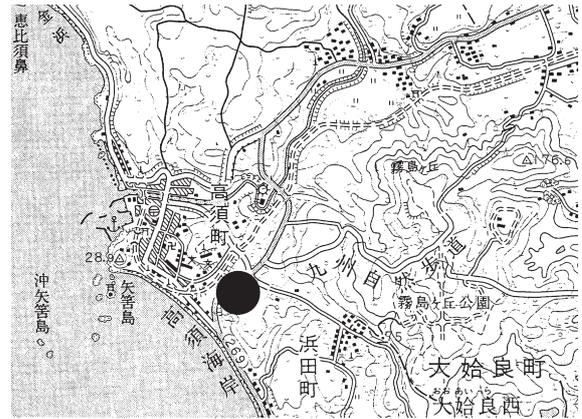


写真1 遺跡の遠景



写真2 集石遺構

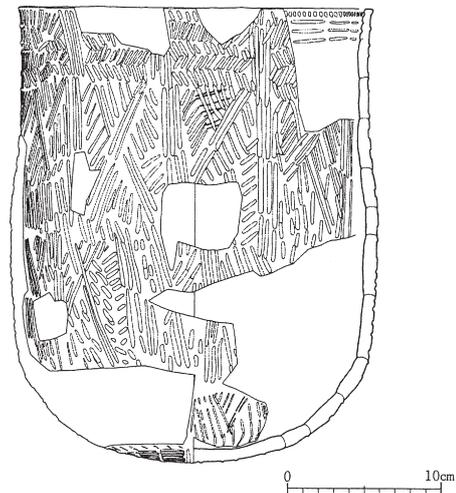


第1図 榎木原遺跡の位置

前期は、曾畑式土器を中心に轟式・深浦式土器が出土している。曾畑式土器は完形になる資料も出土した。

中期は春日式や阿高式などのほか、船元式土器も出土した。船元式土器は少量ながら瀬戸内地方との関連を知る上で貴重な資料となっている。

後期は晩期の次に出土量が多く、岩崎下層式・岩



第2図 曾畑式土器

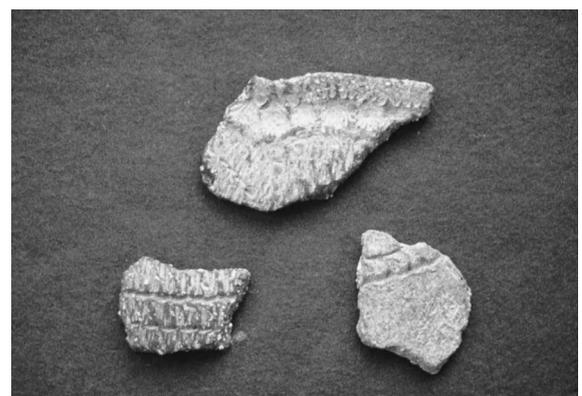
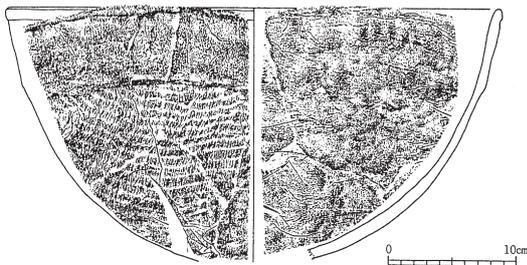


写真3 船元式土器



写真4 縄文時代晩期の竪穴住居跡



第3図 組織痕土器

崎上層式・出水式・市来式・丸尾式土器などが出土した。

最も出土量が多かった晩期は、入佐式・黒川式・刻目突帯文土器と続いて出土した。黒川式土器期と考えられる組織痕土器には、完形に復元できる資料もみられた。

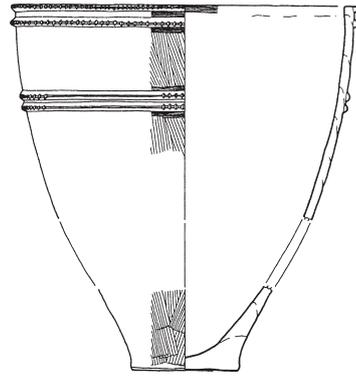
石器には、石鏃・スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・磨石・石皿・石錘・敲石・凹石・砥石など、多種に渡って出土した。量の多い磨石は、敲石や凹石の機能を兼ねたものが多くみられた。また、打製石斧が多く出土したのも特徴的であった。また、4つの孔がある砂岩製の石笛状石製品も出土した。

弥生土器は前期後半から中期に位置づけられるもので、東九州系統のものも含まれている。

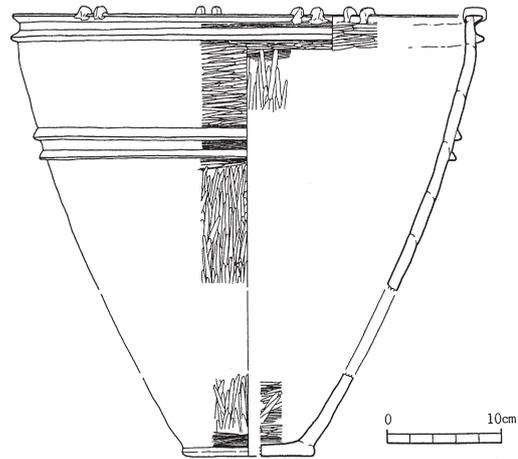
古墳時代の住居跡は5軒確認された。いずれも形態が明確でない。土器から5世紀以降のものと考えられる。土器は甕・壺・埴・鉢・高坏などがある。高坏の脚部を利用したふいごの羽口も出土している。

古代は土師器の坏、須恵器の坏身・坏蓋・甕・壺等が出土した。

中世～近世のものとしては、溝状遺構が3条、古道1本、土坑5基が検出されている。溝状遺構のうち、1号からはふいごの羽口や鉄さいが多量に含まれ、製鉄関連の遺構と考えられている。



第4図 弥生土器



#### 特徴

- ・複数の時代・時期にわたるいわゆる複合遺跡で、土地利用の変遷を知る手がかりとなる遺跡である。
- ・縄文時代晩期の打製石斧（石鋏状石器）が多量に出土しており、当時の生業がうかがえる。
- ・古墳時代後半の資料が多量に出土しており、鹿児島湾岸で多くみられる当時の集落の広がりを知る上で貴重な資料である。

#### 資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管され、一部は上野原縄文の森展示館に展示されている。

#### 参考文献

- 鹿児島県教育委員会1987「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（44）
- 鹿児島県教育委員会1989「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（51）
- 鹿児島県教育委員会1990「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』（52）

（前迫亮一）